
＊
岩淵悦太郎

現代日本語

ことばの正しさとは何か



筑摩総合大学

＊

筑摩書房

*
岩淵悦太郎

現代日本語

ことばの正しさとは何か



筑摩総合大学

筑摩書房

現代日本語

岩淵悦太郎
いわぶちえつたろう

1905年福島県に生まれる。1930年
東京大学国文学科卒。専攻、国語
学、国語史。現在、国立国語研究
所所長。国語学会代表理事。著書
『国語概説』（学芸図書）『現代の
言葉』（講談社）他。

昭和45年1月31日 初版第1刷発行
昭和45年6月30日 初版第4刷発行



著者 ©岩淵悦太郎
発行者 竹之内静雄
発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2-8
Tel (291) 7651 振替東京 4123
郵便番号 101-91

印刷 暁印刷 製本 大口製本

(分類) 1381 (製品) 03209 (出版社) 4604

はしがき

言語の働きとして、私は、

- (1) 認識
- (2) 伝達
- (3) 思考
- (4) 創造

の四つを考えている。

言語が、伝達のために発達して来たことは言うまでもない。猿も言語を持っていると言われるが、その猿の言語——言語とは言っても人間のとはかなり違う——は、伝達用のみをなすだけである。思考や創造の働きはしていない。人間の言語も、そのもとは、伝達のためであつたろう。人間の社会生活の上で、事柄に関する相互の伝達、相互の理解は、極めて重要なことであつて、そのなかで、言語の占めている地位は大きい。ことに、戦後、コミュニケーション理論の展開に伴つて、言語の、社会における重要性が大きく浮び上つて来た。

しかし、言語の場合、伝達だけが重要なのではなくて、われわれが言語で思考するという事実を忘れてはなるまい。言語で思考することによって、人間の文化は大いに進んで来たはずである。

さらに、われわれは言語で新しい事柄を創造して来た。それが最も明確な形で現われるのが文学

作品である。文学は言語芸術と言われて来たように、文学は言語面と不可分の深い関係がある。言語を媒介しないで、文学を表現することも、文学を受け取ることも不可能である。ところが、文学は、その内容が鮮烈であればあるほど、とかく言語面が軽視されがちである。しかしわれわれの心を刺激する最初のもものは、実に言語であって、言語以外の何物でもない。

ところで、われわれが、言語で、伝達するにしても、思考するにしても、また創造するにしても、その基礎となるのは、われわれの持つ語彙である。語彙は、文法の場合ほどではないが、やはり、一種の体系的存在である。この意味で、言語の働きの根底的なものとして、言語による認識、概念化という事実を考えておかなければなるまい。

言語で思考するには、日本語の使用者は日本語で、英語使用者は英語で思考する。そして思考を進めるには、文法が大きな役目をする。伝達や創造は、何を伝達し、何を創造するかという「何を」が問題となつて来るが、認識や思考においては、語彙や文法が物を言う。すなわち、認識と思考とは、四つの働きのうちでも一層基本的なものと言える。

世間では、正しくて、美しくて、豊かな日本語ということが言われている。それでは、具体的には、どういうものが、正しくて、美しくて、豊かなのであろうか。私は、認識、思考、伝達、創造という四つの働きを十分になしとげるものだと思う。われわれは、四つの働きが十分に果せるように、日本語が発達して行くことを望み、その理想に向つて努力しなければならない。

私は、本書で、言語の四つの働きの面から、現代の日本語を考え、それによって、これからの日本語の方向を見定めようと志した。しかし、思考、創造の二つの働きの分野については、極めて不満足な結果になったことを残念に思う。

一九六九年十二月

著 者

目次

はしがき

I ことばによる認識

一 概念化の違い

名付ける

「ミズ」と「ユ」

「ウオ」と「サカナ」

「シラウオ」と「シロウオ」

「オハヨウ」と「オバアサン」

二 新語

新語の発生

外国語と外来語

外来語の出自

三 造語法

七一

四 日本語の語彙

和語・漢語・外来語

九

「上等舶来」

九

日本語に形容詞は少ないか

八

II ことばによる伝達

一 事柄の伝達

九

二 “仲間うち” と “広場”

一〇二

“仲間うち”の伝達

一〇二

“広場”の伝達

一〇五

三 用語

一〇

方言

一〇

標準語

一七

四 マス・コミュニケーション

一三

新聞

一三

放 送

二三〇

五 通じやすい表現

二四二

“一過性”の表現

二四二

相手の立場に立つ

二四七

六 基本語彙と基本漢字

二五五

基本語彙

二五五

基本漢字と当用漢字

二五三

七 語の表記

二六九

漢字と仮名

二六九

語の表記のきまり

二七五

仮名遣

二八五

送り仮名

一九九

八 敬 語

二〇八

伝達と敬語

二〇八

敬意表現と敬語形式

二二六

話題にのぼせた人に対する敬語

二三九

九 言葉の正しさ

二六

言葉における「正しさ」とは何か

二六

貞室の『かたこと』

二五

「正しさ」の基準

二〇

「正しい」のは一つとは限らない

二四

Ⅲ ことばによる思考・創造

一 言葉で考える

二五

二 言葉で創造する

二七

I

ことばによる
認識

現代日本語

ことばの正しさとは何か

一 概念化の違い

名付ける

元来熱帯植物である稲が、現在、北海道のような寒冷地でさえ栽培可能なのは、一つは、稲の品種の改良によるものだ。農林省では、稲や麦などの新しい品種が作られ、それがすぐれている場合には、農林番号を付けている。稲には、言うまでもなく、水田にうえるものと畠にうえるものという違いがある。われわれは、後者を特に「オカボ」と呼んで、区別する。というより、「イネ」という言葉を聞くと、「オカボ」ではなく、水田のものの方を連想するだろう。専門家は、イネを「水稲^{すいとう}」、オカボを「陸稲^{りくとう}」と称している。その水稲の農林一号が昭和六年に生れてから、昭和二十五年までに、五十一号に達した。それ以後は、新しい品種が生れると、品種の特徴やその品種の適地などをもとにして、名称を付け、それを公布することになっている。農林番号も付くけれども、そ

れは登録用のものに過ぎない。

もともと、稲や麦の品種は、古くは民間で名を付けていたのである。そこで、それにならって、あだ名を付けることになったのだ。たとえば、水稻の「ワセニシキ」は、品種として、早生種であって収量が多く、しかも良質という特徴を持つ。そこで「ワセ」と「ニシキ(錦)」とを組み合わせて作ったものだ。「クセシラズ」は、稲の病気に強い品種なのであって、「クセ」を「知ラズ」の意である。また、小麦の「ユキチャボ」は、雪に強く、稈が短いので、「ユキ(雪)」と「チャボ(言うまでもなく、脚が短く、両翼が低く地に接しようとしている)」とを結び付けたものである。「ハシリハダカ」は、裸麦はだかむぎであって、きわめて早生種なので、「ハシリ(走)」を「ハダカ」に付けた。甘藷の「ベニセンガン」は、外の皮が紅色で、収量が多いので、「紅千貫」と名付けたのである。

品種の区別は、番号だけでよいかもしれない。しかし、品種の出来た順に番号を与えていくのであるから、隣り合っている番号が似た品種というわけにはいかない。だから、数字を一つ間違えたら、とんでもない品種に打ち当たるかもしれないのである。

一体、数字は必ずしも覚えやすいものではない。電話番号や年号などもそうである。電話のかけ誤りが少なくないことがそれを物語る。また、電話番号や年号などを記憶するため、その数字に対して、語呂合せの言葉を考え出して、覚えやすくしようとする。そういうことを考えれば、「ワセニシキ」や「ユキチャボ」のように、品種の特徴などをとらえて名付けたものは、一応は覚えやす